

平成28年1月21日

事業経過報告書

文部科学省初等中等教育局長 殿

都道府県教育委員会等名 鹿児島県教育委員会

所 在 地 鹿児島県鹿児島市鴨池新町10番1号

氏 名 教育長 古川 仲二

平成27年度英語教育強化地域拠点事業における事業経過報告書を提出します。

1. 事業の実施期間

委託を受けた日 ～ 平成28年3月31日

2. 強化地域拠点の学校名 (学校数が多い場合は欄を追加すること)

ふりがな	かのやしりつかのやじょしこうとうがっこう	ふりがな	くすもと つとむ
学校名	鹿屋市立鹿屋女子高等学校	校長名	楠元 務
ふりがな	かのやしりつかのやちゅうがっこう	ふりがな	いけみず ひでゆき
学校名	鹿屋市立鹿屋中学校	校長名	池水 秀行
ふりがな	かのやしりつかのやししょうがっこう	ふりがな	ふじさき たけし
学校名	鹿屋市立鹿屋小学校	校長名	藤崎 毅
ふりがな	かのやしりつはらいがわしょうがっこう	ふりがな	くぶき りょういち
学校名	鹿屋市立祓川小学校	校長名	久富木 良一
ふりがな	かのやしりつひがしはらしょうがっこう	ふりがな	やました りょうこ
学校名	鹿屋市立東原小学校	校長名	山下 涼子

3. 研究内容

(1) 研究開発課題

コミュニケーション能力の高い英語好きな児童・生徒の育成をめざし、小・中・高の連携を図った教育課程の編成及び、教材開発を通じた系統的な指導法について実践研究を行う。また、英語教育にかかわる教職員の指導力向上を図る。

(2) 研究の概要

平成21年度から、鹿屋市は小学校外国語活動と中学校英語科の円滑な接続について実践・研究を行ってきた。その結果、諸調査において、本市の中学生は、県が設定している到達目標を年々上回ってきている。

そこで、この実践研究を基盤に、計画的かつ継続的な帯学習を取り入れ、指導の充実を図ると

ともに、小・中・高のより高度な接続について実践研究を進める。【資料1】

そのために、小・中・高等学校教職員の協同による「読むこと」「書くこと」に関する教材開発を通して系統的な指導の充実を図る。

さらに、パフォーマンス評価を活用することにより学習到達度目標が明確化され、指導と評価の一体化を図った授業の展開が可能となる。

最後に、外部人材等を活用した校内研修により小学校教員を含め英語科教職員の指導力の向上を図る。

(3) 現状の分析と仮説等

①現状の分析と研究の目的

ア 鹿屋市は、平成20年度から教育課程特例校として、小学校英語教育の開始学年及び外国語活動の内容研究を行っている。【資料2】この実践研究を通して児童の中には、小学校段階において「書くこと」「読むこと」の技能の基礎を学びたいという意欲を示す児童が見られる。

また、平成21年度からは、文部科学省「小・中連携英語教育改善調査研究事業」の指定のもと、小学校英語科と中学校英語科の円滑な接続の在り方について実践・研究を行ってきた。小・中の連携に基づく橋渡しを充実するために小学校の週1時間の英語教育の活動では不十分なことが多く、改善を図ることで英語力の向上が可能になることも分かってきた。

さらに、小・中学校において指導内容に系統性を持たせる独自の題材・教材が言語活動の充実につながっている。

最後に、外部講師による研修が、小学校英語教育にかかわる教職員の不安感を解消し、授業において英語を運用しながら授業を展開することにつながっていることがアンケートによる意識調査等から明らかになった。

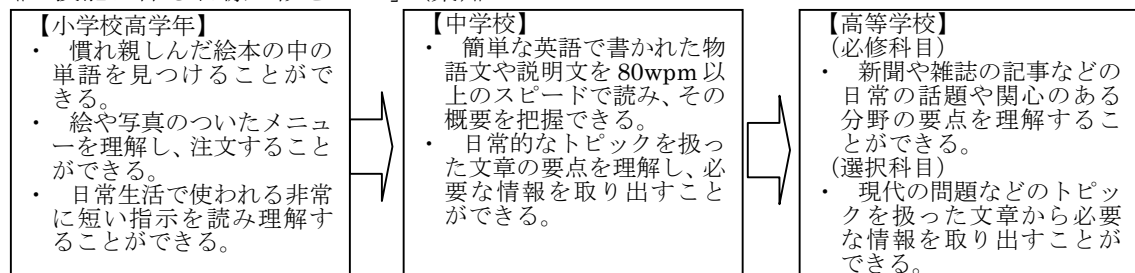
イ コミュニケーション能力の高い英語好きな児童・生徒の育成をめざし、小・中・高の連携を図った教育課程の編成及び、教材開発を通じた系統的な指導法について実践研究を行う。また、英語教育にかかわる教職員の指導力向上を図る。

②研究仮説

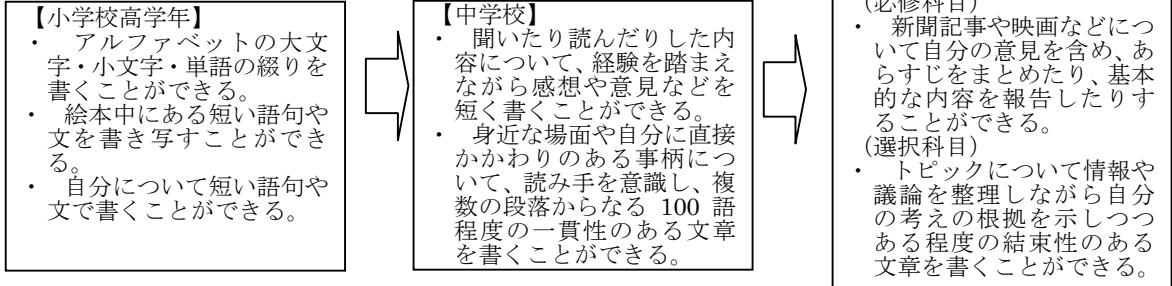
ウ 小学校での3・4年生において外国語活動、5・6年生においては教科型に取り組む。さらに、計画的かつ継続的な帯学習を全校で取り組み、指導の充実を図る。【資料3】

帯学習で活用する教材は、小・中・高等学校教職員の協同により、これまでの「聞くこと」「話すこと」に加えて「読むこと」「書くこと」を中心に開発する。さらに、この教材開発を通して系統的な指導の充実を図る。

《4技能に係る目標「読むこと」(案)》



《4技能に係る目標「書くこと」(案)》



また、小学校においては、英語の授業を支援する外部講師及びALTを配置し、小学校教員が英語による授業を展開できるように、外部人材等を活用した職員朝会等における日常的な研修と定期的な校内研修を実施する。【資料4】

定期的な校内研修や連絡協議会等において英語教育推進リーダーによる指導法の還元研修を実施する。

中学校・高等学校では、小学校との連携を通して、授業自体の見直しを行う。また、パフォーマンス評価を活用することにより学習到達度目標が明確化され、指導と評価の一体化を図った授業の展開が可能となる。P-D-C-Aサイクルによる授業評価により、CAN-DOリスト形式の学習到達目標の見直し・改善を図る。

エ 早期から英語に触れることで、外国語に親しみ積極的にコミュニケーションを図ることができる児童の育成が可能であると考える。小・中・高等学校の教職員の連携により、英語が好きな児童が小学校高学年・中学校・高等学校と進級・進学していくことで今まで以上に英語力を身に付けていくことが期待される。小学校5・6年生については、文字の導入により、文字と音の関連や語順等の学習を通して、「話すこと」「聞くこと」を中心としながら初歩的な「書くこと」「読むこと」のできる児童の育成を図る。また、中学校においては、小学校英語教育における指導や教材等を踏まえた授業を展開することにより、これまで以上に言語活動の充実が図られ、独自の題材や教材の活用を通して4技能の統合的な関連を図った指導が行われる。高等学校においては、小・中学校との連携により、コミュニケーション能力の高い英語好きな生徒の育成が図られる。

③研究成果の評価方法

ア 小学校

- アンケート調査の実施。
 - ・ 研究の第一年次から第三年次まで、経年変化及び同一学年（5・6年生）における定点観察ができるよう意識調査を実施する。
 - ・ 年2回実施（7月、12月）予定
- 学力調査の実施
 - ・ 教科化を図る高学年においては、当該研究委員による学力調査問題等を作成し、4技能の定着度を把握する。
- 外部検定試験の受検結果（対象：全学年）により研究成果を検証する。

イ 中学校

- アンケート調査の実施

- ・ 研究の第一年次から第三年次まで、経年変化を把握できるよう意識調査を実施する。

○ 学力調査の実施

- ・ 外部検定試験及び英語能力テスト【資料5】の結果により研究成果を検証する。
- ・ 校内における定期テスト、鹿児島定着度調査（悉皆調査）の結果により研究成果を検証する。

ウ 高等学校

○ アンケート調査の実施

- ・ 研究開発対象者と、研究開発対象外の生徒との意識の差異を把握するための意識調査を実施する。

○ 学力調査の実施

- ・ 外部検定試験及び英語能力テストの結果により研究成果を検証する。
- ・ 校内における定期テストの結果により研究成果を検証する。

これらの結果を総合的に評価し、コミュニケーション能力の高い英語好きな児童・生徒の育成をめざした仮説の検証を行う。また、研究の経過については、市教育委員会や各学校のホームページ等で発信する。さらに、シンポジウムや鹿屋市及び各大学等で行われる実践発表会における発信を通して、広く市民や学識経験者等への成果の普及および計画の改善にいかす。本研究の成果を平成 28 年度の教育課程特例校の申請に反映させ、平成 29 年度より鹿屋市内全ての小学校（24 校）5・6 年生において教科型の授業を実施する。

(4) 研究開発型 ※平成 27 年度新規採択件については、平成 26 年度は斜線を引くこと。

	開始学年及び週当たり授業時数コマ			
	第一年次 (H26)	第二年次 (H27)	第三年次 (H28)	第四年次 (H29)
①小学校 外国語活動型	第 3 学年 1 コマ	第 3・4 学年 1 コマ	第 3・4 学年 1 コマ	第 3・4 学年 1 コマ
②小学校 教科型	第 5 学年 2 コマ	第 5・6 学年 2 コマ	第 5・6 学年 2 コマ	第 5・6 学年 2 コマ

(5) 研究計画 ※平成 27 年度新規採択件については、第一年次から第三年次まで記載すること。

第一年次～第四年次、校種別

(1) 小学校

【第一年次】

ア 第 3・4 学年の外国語活動の実施・・・週 1 時間（全ての小学校）

- ・ Hi, friends!1・2 の活用
- ・ 独自教材の活用・・・特例校としての研究蓄積を活用
- ・ 「外国語活動型」の年間指導計画の見直しと実践
- ・ 全学年における帯学習の効果的な活用、教材及び年間指導計画等の見直し

イ 第 5・6 学年の教科型英語の実施・・・週 2 時間（全ての小学校）

- ・ Hi, friends!1・2 の活用
- ・ 4 技能を統合した学習題材・教材等の開発と実践

- ・ 文部科学省作成予定の新教材の活用
 - ・ 「外国語教科型」の年間指導計画の見直しと実践
 - ・ 全学年における帯学習の効果的な活用、教材及び年間指導計画等の見直し
- ウ 指導法の工夫及び評価の在り方等についての研究
- ・ 外部試験受検結果の検証と活用（全学年：年1回）
 - ・ 「活動型」と「教科型」の系統性をもたせた指導法の構築
 - ・ 小・中・高の連携を図りながら「教科型」のCAN-DOリスト形式の学習到達目標の見直し
 - ・ 小・中・高の連携を図りながら「教科型」指導法の構築
 - ・ 児童の発達段階に即した評価の在り方
- エ 中学校教員とのチーム・ティーチングによる授業及び研究支援の実施
- ・ 学期1～2回程度実施、小・中連携を推進の実施
 - ・ ALTや外部講師の活用による英語指導にかかわる教職員への研修の実施
- 【第二年次】**
- ア 第3・4学年の外国語活動の実施・・・週1時間（全ての小学校）
- ・ Hi, friends!1・2の活用及び独自教材の活用
 - ・ 独自教材の活用・・・特例校としての研究蓄積を活用
 - ・ 「外国語活動型」の年間指導計画の見直しと実践
 - ・ 全学年における帯学習の効果的な活用、教材及び年間指導計画等の見直し
- イ 第5・6学年の教科型英語の実施・・・週2時間（全ての小学校）
- ・ 4技能を統合した学習題材・教材の開発と実践
 - ・ 「外国語教科型」の年間指導計画の見直しと実践
 - ・ 全学年における帯学習の効果的な活用、教材及び年間指導計画等の見直し
- ウ 指導法の工夫及び評価の在り方等についての研究
- ・ 外部試験受検結果の検証と活用（全学年：年1回）
 - ・ 小・中・高の連携を図りながら「教科型」のCAN-DOリスト形式の学習到達目標の見直し
 - ・ 児童の発達段階に即した評価の在り方
- エ 中学校教員とのチーム・ティーチングによる授業及び研究支援の実施
- ・ 学期1～2回程度実施、小・中連携を推進の実施
 - ・ ALTや外部講師の効果的な活用
- 【第三年次】**
- ア 第3・4学年の外国語活動の実施・・・週1時間（全ての小学校）
- ・ 「外国語活動型」の年間指導計画と実践のまとめ
 - ・ 全学年における帯学習の効果的な活用、教材及び年間指導計画等の見直し
- イ 第5・6学年の教科型英語の実施・・・週2時間（全ての小学校）
- ・ 4技能を統合した学習題材・教材の開発の検証・まとめ
 - ・ 「外国語教科型」の年間指導計画と実践のまとめ
 - ・ 全学年における帯学習の効果的な活用、教材及び年間指導計画等の見直し
- ウ 指導法の工夫及び評価の在り方等についての研究
- ・ 外部試験受検結果の蓄積に基づく初年度との比較検証
 - ・ 小・中・高の連携を図りながら「教科型」のCAN-DOリスト形式の学習到達目標の見直し

- ・ 児童の発達段階に即した評価の在り方のまとめ
- エ 中学校教員とのチーム・ティーチングによる授業及び研究支援の実施
 - ・ ALT や外部講師の効果的な活用の検証・まとめ
- オ 3年間の取組をまとめた冊子の作成

(2) 中学校

【第一年次】

- ア 小学校の新設教科の位置付けを踏まえた校内英語教員の研究会等の実施
 - ・ 小・中・高連携を図る中学校英語教育課程の編成
 - ・ 指導法の工夫及び評価の在り方等についての研究
 - ・ 4技能の統合的な活用を図る授業の充実を図るための題材・教材開発と授業実践
 - ・ 年間指導計画と Can-Do リスト形式の学習到達目標の見直し
 - ・ 外部検定試験及び語学能力テストの結果の検証と活用（各学期ごと）
- イ 小学校教員とのチーム・ティーチングによる授業及び研究支援の実施
 - ・ 学期1～2回程度実施、小・中連携の推進

【第二年次】

- ア 小学校の新設教科の位置付けを踏まえた校内英語教員の研究会等の実施
 - ・ 小・中・高連携を図る中学校英語教育課程の編成
 - ・ 指導法の工夫及び評価の在り方等についての研究
 - ・ 4技能の統合的な活用を図る授業の充実を図るための題材・教材開発と授業実践
 - ・ 年間指導計画と Can-Do リスト形式の学習到達目標の見直し
 - ・ 外部検定試験及び語学能力テストの結果の検証と活用（各学期ごと）
- イ 小学校教員とのチーム・ティーチングによる授業及び研究支援の実施
 - ・ 学期1～2回程度実施、小・中連携の推進

【第三年次】

- ア 小学校の新設教科の位置付けを踏まえた校内英語教員の研究会等の実施
 - ・ 小・中・高連携を図る中学校英語教育課程の編成
 - ・ 指導法の工夫及び評価の在り方等についての研究
 - ・ 4技能の統合的な活用を図る授業の充実を図るための題材・教材開発と授業実践
 - ・ 年間指導計画と Can-Do リスト形式の学習到達目標の見直し
 - ・ 外部検定試験受検結果及び英語能力判定テストの結果の検証と活用（各学期ごと）
- イ 小学校教員とのチーム・ティーチングによる授業及び研究支援の実施
 - ・ 学期1～2回程度実施、小・中連携の推進
- ウ 3年間の取組をまとめた冊子の作成

(3) 高等学校【第一～三年次】

- ア 小・中学校の授業参観及び研究支援等の実施
 - ・ 小・中学校英語教育の実態を把握し、小・中学校の教育課程の編成について参画するなどの支援体制を構築する。
 - ・ 外部検定試験受検結果及び英語能力判定テストの結果の検証と活用（各学期ごと）

- ・ 年間指導計画と Can-Do リスト形式の学習到達目標の見直し
- ・ 小・中学校英語教育を踏まえた評価方法の共同開発
- イ 小・中学校英語教育を踏まえ教育課程の実施及び工夫・改善
 - ・ 小・中学校英語教育を踏まえ、言語活動を充実図る教育課程の編成及び実施。（英語による発表会、討論等）

平成27年度の進捗状況・課題

- ・ 各校種とも概ね研究計画を踏まえて実施できた。

○ 小学校

ア 第3・4学年

- ・ 授業に関して、年間20時間の「外国語活動型」の授業時数を2学期以降年間35時間に増加した。
- ・ 年間指導計画の見直しを授業実践に基づき Hi, friends! との関連を図りながら検討する必要がある。
- ・ 実態調査については2月に実施予定である。

イ 第5・6学年

- ・ 授業に関して、鹿屋小学校の先行的な取組を基に、各小学校においても年間35時間の「外国語活動型」の授業時数を2学期以降「教科型」年間70時間を目指し授業時数を増加した。
- ・ 鹿屋小学校から、教員及び英語教育支援員を校内研修及び授業に派遣しながら、T-Tでの授業を実施した。
- ・ 学習題材・教材等の開発については、英語教育推進リーダー中央研修受講者及び英語教育支援員等を中心に開発を行い、授業で活用した。次年度以降は、教材の効果を検証しながら、継続して取り組んでいく。
- ・ CAN-DO リスト形式の学習到達目標及び年間指導計画に関して、各学校における実践及び実態把握に基づいて継続した検討が必要である。
- ・ 帯学習については、鹿屋小学校において、教育課程内での実施を目指した取組を先行実施した。
- ・ 授業時数の確保に向け、短時間学習の内容及び指導体制について継続して検討する必要がある。

ウ 指導法の工夫及び評価の在り方等について

- ・ 外部試験の活用については、2月に実施予定である。
- ・ 評価の在り方については、継続した研修が必要である。

エ 中学校教員との T-T について

- ・ 1学期、3学期（予定）の授業乗り入れによる小中連携を実施した。
- ・ ALT 及び英語教育支援員を講師にした日常的な研修及び定期的な校内研修の充実を図る必要がある。

○ 中学校

- ア 小学校の新設教科の位置づけを踏まえた校内英語教員の研修会等の実施

- ・ 外部検定試験及び語学能力テストの結果の検証（英検：各学期、語学能力テスト：11月）を行った。
 - ・ 他校種の授業参観及び授業研究を通じた指導法改善を図った。
 - ・ 各校種との連携を通じた年間指導計画及びCAN-DOリスト形式の学習到達目標の見直しを行う必要がある。
- イ 小学校教員とのT-Tによる授業及び研究支援の実施
- ・ 1学期、3学期（予定）の授業乗り入れによる小中連携を実施した。
 - ・ 次年度以降も高学年において担任が単独で授業を行えるようにクラスルームイングリッシュの研修及び指導と評価についての支援を継続して行う必要がある。
- 高等学校
- ア 小・中学校の授業参観及び研究支援等の実施
- ・ 小・中学校における校内研修及び授業参観等を通して、指導法改善に向けた協議に参加した。
 - ・ 小・中学校の教育課程編成にいての支援を行っていく必要がある。
 - ・ CAN-DOリスト形式の学習到達目標及び年間指導計画の見直しについては、本年度の状況を踏まえ次年度以降実施する。
- イ 小・中学校英語教育を踏まえた評価方法の共同開発
- ・ 次年度以降も中学校・高等学校における統一したアセスメント（外部検定試験・英語能力テスト）による評価方法の検討を継続して実施する必要がある。

（6）評価計画 ※平成27年度新規採択件については、第一年次から第三年次まで記載すること。

第一年次～第四年次、校種別

(1) 小学校

【第一年次】

ア 評価

- ・ 評価研究部会を設置し、小・中学校教員が連携を図りながら評価について研究を行う。
- ① 外国語活動型（3～6年生）
- ・ 評価方法：文章記述とし、授業観察、児童の発表等により評価を行う。
 - ・ 評価の観点：コミュニケーションへの関心・意欲・態度
外国語への慣れ親しみ、言語や文化に関する気付き
- ② 教科型（5～6年生）
- ・ CAN-DOリスト形式の学習到達目標に基づいた評価（各学期）
 - ・ 評価方法：パフォーマンス評価を活用した評価の実施
文章記述とし、授業観察、児童の発表等により評価を行う。
 - ・ 評価の観点：コミュニケーションへの関心・意欲・態度
初歩的な外国語表現の能力
初歩的な外国語理解の能力
言語や文化に関する気付き

イ 教育課程の編成

- ・ 教育課程部会を設置し、小・中・高等学校教員が連携を図りながら外国語活動型及び教科型の教育課程の編成について評価を行う。

ウ 独自に教材開発作成

- ・ 教材開発部会を小・中・高等学校教員が連携を図りながら、児童の発達段階を踏まえ、地域や郷土の素材を生かした教材について評価を行う。

エ 研究全体の評価

- 英語学習についての意識調査（※ 対象：3～6年生）
 - ・ 児童へのアンケート調査の実施：経年変化を把握する。
 - ・ 保護者へのアンケート調査の実施
- 外部検定試験受検結果の活用
- 学力調査
 - ・ 教科型の4技能を把握する。
 - ・ 独自に開発作成
 - ・ 12月実施予定（※ 対象：5～6年生）
- シンポジウム・鹿屋市教育実践発表会等での発表
 - ・ 市民等への実践報告
 - ・ 保護者や市民への授業公開

【第二～三年次】

ア 評価

- ・ 評価研究部会を設置し小・中学校教員が連携を図りながら、評価について研究行う。

- ① 外国語活動型・・・第3学年及び第4学年
 - ・ 評価方法：文章記述とし、授業観察、児童の発表等により評価を行う。
 - ・ 評価の観点：コミュニケーションへの関心・意欲・態度
外国語への慣れ親しみ、言語や文化に関する気付き
- ② 教科型・・・第5学年及び第6学年
 - ・ CAN-DO リスト形式の学習到達目標に基づいた評価（各学期）
 - ・ 評価方法：到達度評価とし、授業観察、児童の作品、発表等により評価を行う。
 - ・ 評価の観点：コミュニケーションへの関心・意欲・態度
初歩的な外国語表現の能力
初歩的な外国語理解の能力
言語や文化に関する気付き

イ 教育課程の編成

- ・ 教育課程部会を設置し、小・中・高等学校教員が連携を図りながら、外国語活動型及び教科型の教育課程の編成について研究を行う。

ウ 独自に教材開発作成

- ・ 教材開発部会を小・中・高等学校教員が連携を図りながら、児童の発達段階を踏まえ、地域や郷土の素材を生かした教材を行う。

エ 研究全体の評価

- 英語学習についての意識調査（※ 対象：3～6年生）

- ・ 児童へのアンケート調査の実施：経年変化を把握する。
- ・ 保護者へのアンケート調査の実施
- 学力調査
 - ・ 教科型の4技能を把握する。
 - ・ 独自に開発作成
 - ・ 12月実施予定（※ 対象：5～6年生）
- 外部検定試験受検結果の活用（対象：全学年）
- シンポジウム・鹿屋市教育実践発表会等での発表
 - ・ 市民等への実践報告
 - ・ 保護者や市民への授業公開
- 第三年次は研究の成果をまとめた冊子を作成

(2) 中学校

【第一～三年次】

ア 小・中・高等学校の連携を図る評価における研究体制の構築

- ・ 評価研究部会を設置し、評価の観点、方法、到達目標等の検討を行い、小学校段階で教科化された英語教育を受けた生徒と受けていない生徒との到達目標等の違いを明確にする研究について評価を行う。

イ Can-Do リストを反映した教育課程の編成

- ・ 教育課程部会を設置し、小・中・高等学校教員が連携を図りながら、教科化した小学校英語教育の取組を踏まえた教育課程の編成について評価を行う。
- ・ CAN-DO リスト形式の学習到達目標に基づいた評価の実施

ウ 研究全体の評価

- 英語学習についての意識調査
 - ・ アンケートによる。経年変化を把握する。
 - ・ 独自に開発作成
 - ・ 7月及び12月実施予定 ※ 年2回
- 学力調査
 - ・ 外部検定試験受検結果及び英語能力判定テストにより英語力を把握する。
※ 対象：全学年
 - ・ 鹿児島学習定着度調査（悉皆調査）の結果の検証と活用
- シンポジウム・鹿屋市教育実践発表会等での発表
 - ・ 市民等への実践報告
 - ・ 保護者や市民への授業公開
- 第三年次は研究の成果をまとめた冊子を作成

(3) 高等学校

【第一～三年次】

ア 小・中・高等学校の連携を図る評価における研究体制の構築

- ・ 評価研究部会を設置し、評価の観点、方法、到達目標等の検討を行い、小学校段階で教

科化された英語教育を受けた生徒と受けていない生徒との到達目標等の違いを明確にする研究について評価を行う。

イ Can-Do リストを反映した教育課程の編成

- ・ 教育課程部会を設置し、小・中・高等学校教員が連携を図りながら、教科化した小学校英語教育の取組を踏まえた教育課程の編成について評価を行う。
- ・ CAN-DO リスト形式の学習到達目標に基づいた評価の実施

ウ 研究全体の評価

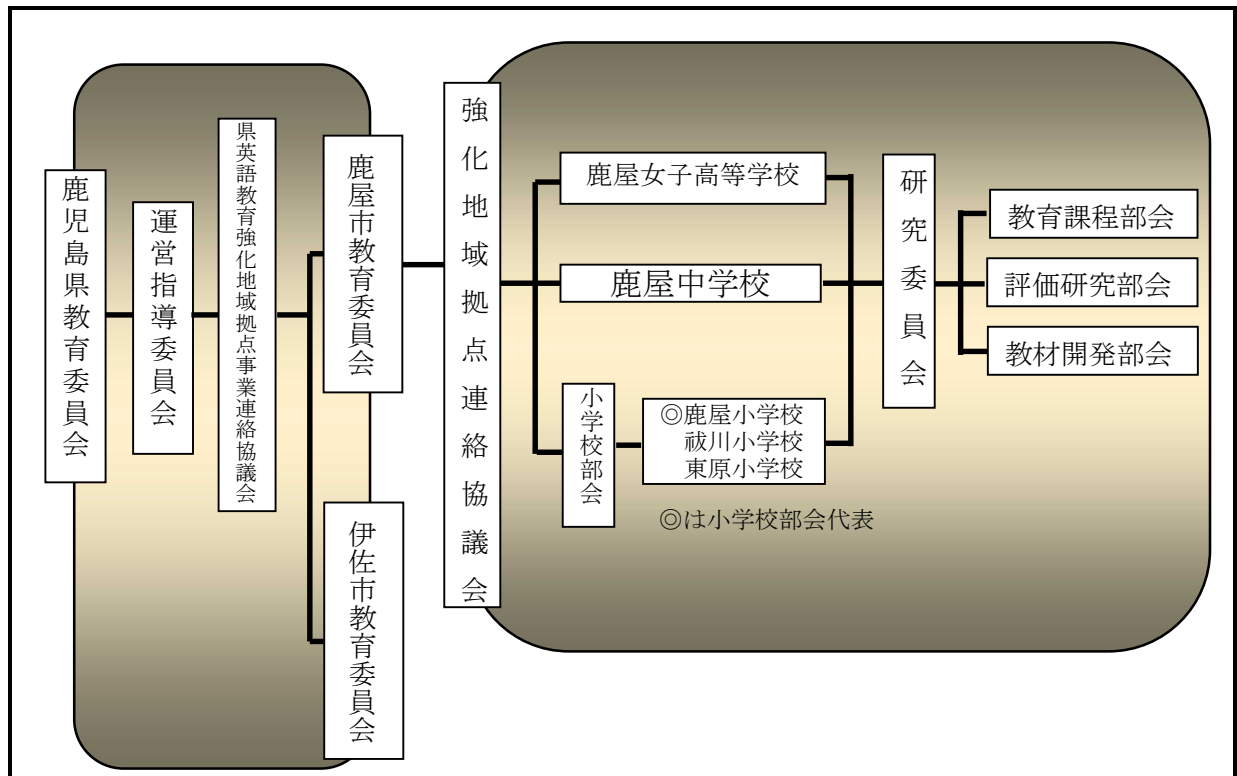
- 英語学習についての意識調査
 - ・ アンケートにより経年変化を把握する。
 - ・ 7月及び12月実施予定 ※ 年2回
- 学力調査
 - ・ 外部検定試験受検結果及び英語能力判定テストにより英語力を把握する。
※ 対象：全学年
- シンポジウム・鹿屋市教育実践発表会等での発表
 - ・ 市民等への実践報告
 - ・ 保護者や市民への授業公開
- 第三年次は研究の成果をまとめた冊子を作成

○平成27年度の進捗状況・課題

- ・ 各校種とも概ね研究計画を踏まえて実施できた。
- ・ 3校種における実態調査は2月に実施予定である。
- ・ 小学校において、授業研究や単元分析を通じたパフォーマンス評価の共通理解を図った。
- ・ 小学校においては、CAN-DO リスト形式の学習到達目標の作成及びパフォーマンス評価の検討を継続して実施する必要がある。
- ・ 独自教材の開発及び Hi, friends! の活用については、平成28年度指導計画案として作成するができた。しかしながら、次年度以降も継続して授業実践を通じた検討を継続して実施していく必要がある。
- ・ 教育課程の編成については、帯学習の教育課程内での実施に向け十分な検討が必要である。
- ・ 中学校においては、学期ごとに英語検定試験の受検状況の分析、11月に実施した英語能力判定テストの分析を実施した。また、分析した生徒の実態に基づいた高等学校との情報の共有と指導と評価の在り方について検討を行う必要がある。
- ・ 高等学校においては、11月に実施した英語能力判定テストの分析を実施した。また、分析した生徒の実態及び小中学校における授業に基づいた指導法改善を行った。
- ・ 高等学校においては、次年度以降も共通したアセスメント（外部検定試験及び英語能力テスト）に基づいた小・中学校の授業を通じた校内研修への参加及び研究支援を行う必要がある。
- ・ 英語教育フォーラムを実施予定（2月3日）である。

4. 研究組織

(1) 研究組織の概要



(2) 運営指導委員会

①活動計画

- 実施内容及び実施予定
 - ・ 年2回（8月・10月に1回程度）実施する。
 - ・ 実施に当たっては、研究の進捗状況の情報交換に加え、当該研究校の事例発表、実践発表等を行い、教員の指導力向上を図る実践的研究会となるよう工夫する。
 - ・ 有識者である大学教員の講話を実施し、先進的な研究となるよう工夫する。

○ 指導助言を行う具体的な事項

【小学校】

- ・ 5・6年生における CAN-DO リスト形式の学習到達目標が適切であるか。
- ・ 小・中学校の系統性を踏まえた教育課程の編成は適切であるか。
- ・ 高学年の教科型、中学年の外国語活動型の授業で活用する教材は適切であるか。
- ・ 小学校段階で基礎的な英語運用力を身に付けさせる指導法の研究内容は適切であるか。
- ・ 研究全般が小・中学校連携を図り、教育課程及び指導法などが円滑な接続に資するものであるか。
- ・ 加配教員の活用及び非常勤講師の活用が適切であるか。

【中学校】

- ・ CAN-DO リスト形式の学習到達目標が適切であるか。
- ・ 小・中の系統性を踏まえた教育課程の編成は適切であるか。

- ・ Can-Do リストは適切に作成され、教員と生徒間が共有化し、活用が図られているか。
- ・ 小学校教員とのティーム・ティーチングによる授業が効果的に実施されているか。
- ・ 小学校の教科化を踏まえ、英語で授業を行うなど、指導法の工夫改善が図られているか。

【高等学校】

- ・ CAN-DO リスト形式の学習到達目標が適切であるか。
- ・ 中学校の系統性を踏まえた教育課程の編成は適切であるか。
- ・ Can-Do リストは適切に作成され、教員と生徒間が共有化し、活用が図られているか。
- ・ 中学校の教科化を踏まえた指導法の工夫・改善が図られているか。

○平成27年度の進捗状況・課題

- ・ 運営指導委員会を（第1回目：10月 第2回目：2月【予定】）実施
- ・ 10月の運営指導委員会において、本事業の研究内容及び研究計画等の共通理解や研究の進め方等について助言をいただいた。
 - (1) これまでの教育課程特例校を活用した研究との関連について
 - ア 平成17年度からの研究の蓄積に基づいた「教科型」への移行は、指導者や児童への配慮が図られている。
 - イ 今後、文科省からの Hi, friends! や Hi, friends! Plus をどの様に年間指導計画に反映した取組を行っていくのか十分に検討が必要である。
 - (2) 小学校教員の指導力・英語力向上に向けた研修方法について
 - ア 英語教育支援員を活用した指導力向上及び英語力向上の取組が行われている。
 - イ 高学年における担任による「教科型」の授業実施に向けては、研修の内容や頻度を検討し充実を図っていく必要がある。
 - (3) 独自教材の開発について
 - ア 絵本の読み聞かせやオリジナルの絵カード等が授業で活用され各小学校で共通した取組が行われている。
 - イ ICTの活用を視野にいれた教材の開発も必要である。
 - (4) 研究成果の情報の発信について
 - ア 研究校のホームページの活用及び英語教育フォーラム（予定）による情報の発信が図られている。
 - イ 客観的なデータに基づく検証と授業実践に基づく研究成果の発信に取り組む必要がある。
 - ウ 定期的にシンポジウム等の有識者を交えた会の中で、取組を協議したり、広く研究校以外の先生方からの意見を踏まえて協議したりする場をもつ必要がある。
- ・ 運営指導委員会とは別に、本事業の連絡協議会を5回（今後の予定も含む）行い、協議した内容等を校内でも検討しながら進めた。
- ・ 運営指導委員会や連絡協議会の協議内容等については、各学校への訪問等を行い、研究校の管理職及び担当者と情報を共有しながら連携を密に図りながら研究支援を行った。
- ・ 各校種において外部検定試験等の分析及び生徒の実態に基づく CAN-DO リスト形式の学習到達目標の検証や修正を継続して行う必要がある。
- ・ CAN-DO リスト形式の学習到達目標が小中高等学校における一貫したものになっている

か今後も継続して協議を行う必要がある。

- ・ 伊佐市との情報の共有と連携を密に図りながら、研究を推進していく必要がある。

5. 年間事業計画

月	強化地域拠点の取組	運営指導委員会
4月	<ul style="list-style-type: none"> ・ 研究指定校への研究計画等の説明（訪問による） ・ 英語教育推進リーダー中央研修参加（中学校20～24日） ・ 小・中・高等学校を通じた英語教育強化事業に関する説明会（文科省：27日） ・ 英語能力判定テスト説明会〔英語科主任会〕（28日） 	
5月	<ul style="list-style-type: none"> ・ 英語教育支援員研修会（7日） ・ 英語教育推進会議〔小・中学校外国語担当及び管理職〕（15日） 	
6月	<ul style="list-style-type: none"> ・ 第1回実用英語技能検定（6日） ・ 英語教育推進リーダー中央研修参加（小学校8～12日） ・ 「小学校英語教育に関する調査研究」における「外国語教育に関する実態調査（小学校・教員）」の実施（10～29日） ・ 小学校外国語活動指導法研修会（12日） ・ 市中学校英語科主任等研修会（25日） ・ 県移動講座「円滑な連携を図る小学校外国語活動・中学校英語講座」（26日） 	
7月	第1回鹿児島県英語教育強化地域拠点事業連絡協議会（県庁：23日）・「かのや英語大好き」事業研究公開への参加〔下名小〕（1日）	
8月	<ul style="list-style-type: none"> ・ 英語教員スキルアッププロジェクト〔1日目〕（10日） ・ 各学校における校内研修等の実施 	
9月	<ul style="list-style-type: none"> ・ 鹿屋市英語科主任等研修会（16日） ・ 英語教育支援員研修会（17日） 	
10月	第2回鹿児島県英語教育強化地域拠点事業連絡協議会（県庁：15日） <ul style="list-style-type: none"> ・ 英語教員スキルアッププロジェクト〔2日目〕（7日） ・ 英語教員スキルアッププロジェクト〔3日目〕（27日） ・ 研究指定校との説明及び研究推進に向けての共通理解（訪問による） 	第1回運営指導委員会（県庁：15日）
11月	<ul style="list-style-type: none"> ・ 研究指定校との説明及び研究推進に向けての共通理解（訪問による） ・ 第2回実用英語技能検定（10日） ・ 教務主任等研修会における周知（10日） ・ 鹿屋小学校小中高等学校合同による校内研修（第1回鹿屋市連絡協議会を兼ねる）（25日） ・ 英語能力テスト（英検 IBA の実施） 	
12月	<ul style="list-style-type: none"> ・ 第2回鹿屋市強化地域拠点事業連絡協議会（1日） 	

1月	<ul style="list-style-type: none"> ・第3回鹿屋市強化地域拠点事業連絡協議会（26日） ・第3回実用英語技能検定（23日） ・先進校視察 	
2月	<p>第4回鹿屋市強化地域拠点連絡協議会（17日）</p> <p>第3回鹿児島県英語教育強化地域拠点事業連絡協議会（実施会場：県庁）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・英語教育フォーラム（3日） ・「かのや英語大好き」事業研究公開〔細山田小〕への参加（12日） ・実態把握の実施及び次年度の計画 	第2回運営指導委員会（県庁）
3月	<ul style="list-style-type: none"> ・第5回鹿屋市強化地域拠点事業連絡協議会（4日） ・次年度の計画 	
【その他の取組】※あれば記入		

平成28年1月21日

事業経過報告書

文部科学省初等中等教育局長 殿

都道府県教育委員会等名 鹿児島県教育委員会

所 在 地 鹿児島県鹿児島市鴨池新町10番1号

代表者職氏名 古川 仲二

平成27年度英語教育強化地域拠点事業における事業経過報告書を提出します。

1. 事業の実施期間

委託を受けた日 ～ 平成28年3月31日

2. 強化地域拠点の学校名 (学校数が多い場合は欄を追加すること)

ふりがな	かごしまけんりつ おおくちこうとうがっこう	ふりがな	やまのうち のぶあき
学校名	鹿児島県立 大口高等学校	校長名	山之内 伸明
ふりがな	いさしりつ おおくちちゅうおうちゅうがっこう	ふりがな	はらさき りゅういち
学校名	伊佐市立 大口中央中学校	校長名	原崎 竜一
ふりがな	いさしりつ おおくちしょうがっこう	ふりがな	つるだ てるお
学校名	伊佐市立 大口小学校	校長名	鶴田 照男
ふりがな	いさしりつ おおくちひがししょうがっこう	ふりがな	きたさこ いほみ
学校名	伊佐市立 大口東小学校	校長名	北迫 五百見
ふりがな	いさしりつ うしおしょうがっこう	ふりがな	くわづる よういち
学校名	伊佐市立 牛尾小学校	校長名	桑水流 洋一
ふりがな	いさしりつ やまのしょうがっこう	ふりがな	ふくどめ あきと
学校名	伊佐市立 山野小学校	校長名	福留 明人
ふりがな	いさしりつ ひらいずみしょうがっこう	ふりがな	よしだ ただし
学校名	伊佐市立 平出水小学校	校長名	吉田 正
ふりがな	いさしりつ はつきしょうがっこう	ふりがな	にしのその まさしげ
学校名	伊佐市立 羽月小学校	校長名	西之園 正茂
ふりがな	いさしりつ はつきにししょうがっこう	ふりがな	まにわ こうじろう
学校名	伊佐市立 羽月西小学校	校長名	馬庭 浩二郎

ふりがな	いさしりつ そぎしょうがっこう	ふりがな	ふだうち としひろ
学校名	伊佐市立 曾木小学校	校長名	札内 俊弘
ふりがな	いさしりつ はりもちしょうがっこう	ふりがな	くぼ まさはる
学校名	伊佐市立 針持小学校	校長名	久保 正治

3. 研究内容

(1) 研究開発課題

小学校における英語教育実施学年の早期化，高学年における英語教育の「教科型」の目標や内容，評価方法，授業時数等の研究開発を踏まえ，中学校・高等学校における英語教育の目標及び内容の高度化を受けた教育課程の編成及び指導方法改善に資する実証的研究を行う。

(2) 研究の概要

伊佐市は，湯之尾小学校が平成19年・20年度に文部科学省「小学校英語教育推進事業」を，羽月西小学校が平成21年度に文部科学省「小学校外国語活動実践研究事業」，平成22年度に県の「外国語活動実践研究」の指定を受け，外国語活動の研究を行ってきた。また，市では平成23年度から平成26年度に小学校外国語活動学習会を開催し，外国語活動における研修及び小・中間の情報交換等を行ってきた。文部科学省が「英語教育改革実施計画」を示したことにより，今後，小学校英語教育の開始学年，教科化の研究及びこれらを踏まえた中・高等学校の教育課程の編成及び指導方法改善が喫緊の課題である。

そこで，伊佐市のこれまでの研究実践の成果を生かしながら，大口中学校区の全小学校及び大口中学校，県立大口中学校を「英語教育強化地域」と指定し，小学校における英語教育実施学年の早期化，「外国語活動型」「教科型」の目標や内容，評価方法，授業時数等の研究開発を行う。また，小学校英語教育の拡充を踏まえた中学校及び高等学校を通じた系統的な英語教育について，実践的な取組を推進し，調査研究を行う。

(3) 現状の分析と仮説等

① 現状の分析と研究の目的

伊佐市では，総合的な学習の時間での国際理解教育や創意の時間等を活用して，小学校低・中学年においてALTとの交流を通して，外国語や外国の文化にふれる活動に取り組んできた。また，高学年においても外国語活動のねらいであるコミュニケーション能力の素地の育成にも力を入れ，小・中学校でALTの活発な活用も行われてきた。

しかしながら，小学校での外国語活動の学習から中学校への十分な橋渡しができているとは言えず，平成25年度の鹿児島学習定着度調査の英語の結果では，中学校1・2年ともに平均通過率の数値が下回っている。

そこで，小学校開始学年の早期化と教科化及び中学校・高等学校との連携を強化し，英語による小・中・高一貫教育を推進し，教員の指導力及び生徒の英語力の向上を図る。

② 研究仮説

小学校における英語教育開始学年の早期化及び高学年における英語教育の教科化を図る教育課程を編成するとともに，加配教員を英語教育専科として位置付け，本事業を推進するため

に校内研修を中核とした研究体制の充実を図る。また、小学校においては、加配の教員を配置した学校において、先進的な実践の取組を行わせ、他の小学校に研究成果を還元させる強化地域拠点連絡協議会を設置する。これらにより、コミュニケーション能力の素地に加え、小学校段階における初歩的な英語運用能力の基礎を培うことができると思われる。

中学校においては、小・中学校連携の観点から、中学校教員が連携小学校でチーム・ティーチングによる授業の実施や研究支援を行うなどの体制を構築する。これらにより、中学校教員が小学校英語教育を踏まえ、授業を英語で行い、英語によるプレゼンテーション、意見交換等の言語活動の充実を図る教育課程を編成するとともに、指導法改善を図ることで、生徒に4技能を統合的に活用する力を身に付けさせ、コミュニケーション能力を一層育成することが期待できる。

高等学校においては、中・高等学校の連携の観点から高等学校の教員が中学校での授業参観や授業実践を行い、実態を把握し、中学校の教育課程の編成について参画するなどの支援体制を構築する。これらにより、中学校英語教育を踏まえ、英語による発表会、討論等の言語活動の充実を図る教育課程を編成するとともに、指導法改善を図ることができる。

③ 研究成果の評価方法

ア 小学校

○ アンケート調査の実施

- ・ 研究の第1年次から第3年次まで、経年変化を把握できるよう意識調査を実施する。
- ・ 年2回実施（7月、12月）

○ 学力調査の実施

教科化を図る高学年においては、当該研究推進委員が学力調査問題等を作成し、4技能の定着度を把握する。研究の2年次以降を予定。

イ 中学校

○ アンケート調査の実施

- ・ 研究の第1年次から第3年次まで、経年変化を把握できるよう意識調査を実施する。

○ 学力調査の実施

- ・ 小学校段階において教科として英語教育を履修した中1を対象に英語検定試験等の外部試験を実施する。研究の3年次を予定。

ウ 高等学校

○ アンケート調査の実施

- ・ 研究の第1年次から第3年次まで、経年変化を把握できるよう意識調査を実施する。

(4) 研究開発型 ※平成27年度新規採択件については、平成26年度は斜線を引くこと。

	開始学年及び週当たり授業時数コマ			
	第一年次 (H26)	第二年次 (H27)	第三年次 (H28)	第四年次 (H29)
①小学校 外国語活動型	第 学年 コマ	第3・4・5 学年 1コマ	第3・4学年 1コマ	第3・4学年 1コマ
②小学校 教科型	第 学年 コマ	第 6学年 1コマ	第5・6学年 2コマ	第5・6学年 2コマ

			※週1回程度（15分） はモジュール	※1コマはモジュール
--	--	--	-----------------------	------------

(5) 研究計画 ※平成27年度新規採択件については、第一年次から第三年次まで記載すること。

① 小学校

【第1年次】

ア 新設教科として位置付けた特別の教育課程の実施及び工夫・改善

- ・ 初歩的な英語運用能力の育成を図る特別の教育課程の編成
- ・ Can-Do リストの作成検討

イ 第3・4学年の外国語活動の実施及び研究

- ・ 指導計画及び指導法の工夫，教材，評価の在り方等についての研究
- ・ Hi, friends!1 の活用及び先進的な取組を参考にした独自教材の研究・開発

ウ 第6学年の教科型英語の実施及び研究

- ・ 指導計画及び指導法の工夫，教材，評価の在り方等についての研究
- ・ 文部科学省作成予定の教材の活用及び先進的な取組を参考にした独自教材の研究・開発

エ 中学校教員とのチーム・ティーチングによる授業及び研究支援の実施

オ 次年度に向けての研究推進

- ・ モジュールについての研究（指導計画及び指導法の工夫，教材等の作成）
- ・ 外国語活動の複式学級における指導計画及び指導法の工夫等についての研究

【第2年次】

ア 新設教科として位置付けた特別の教育課程の実施及び工夫・改善

- ・ 初歩的な英語運用能力の育成を図る特別の教育課程の編成
- ・ Can-Do リストの作成検討

イ 第3・4学年の外国語活動の実施・・・週1時間

- ・ 指導計画及び指導法（複式指導含む）の工夫，教材，評価の在り方等についての研究
- ・ Hi, friends!1・2の活用及び独自教材の活用・改訂

ウ 第5・6学年の教科型英語の実施・・・週2時間（うち週1時間分はモジュールで実施）

- ・ 指導計画及び指導法の工夫，教材，評価の在り方等についての研究
- ・ 文部科学省作成予定の教材の活用及び独自教材の研究・開発
- ・ モジュール（15分×週3回）の実施

エ 中学校教員とのチーム・ティーチングによる授業及び研究支援の実施

オ 次年度に向けての研究推進

- ・ モジュールについての研究（指導計画及び指導法の工夫，教材等の作成）
- ・ 教科型英語の複式学級における指導計画及び指導法の工夫等についての研究

【第3年次】

ア 新設教科として位置付けた特別の教育課程の実施及び工夫・改善

- ・ 初歩的な英語運用能力の育成を図る特別の教育課程の編成
- ・ Can-Do リストの作成検討

イ 第3・4学年の外国語活動の実施・・・週1時間

- ・ 指導計画及び指導法（複式指導含む）の工夫，教材，評価の在り方等についての研究
- ・ Hi, friends!1・2の活用及び独自教材の活用・改訂
- ウ 第5・6学年の教科型英語の実施・・・週2時間
 - ・ 指導計画及び指導法（複式指導含む）の工夫，教材，評価の在り方等についての研究
 - ・ 文部科学省作成予定の教材の活用及び独自教材の研究・開発
 - ・ モジュール（15分×週3回）の実施
- エ 中学校教員とのチーム・ティーチングによる授業及び研究支援の実施

② 中学校

【第1年次】

- ア 小学校の新設教科の位置付けを踏まえた校内英語教員の研究会等の実施
 - ・ 小・中連携を図る中学校英語教育課程の編成
 - ・ 指導法の工夫及び評価の在り方についての研究
 - ・ 年間指導計画とCAN-DOリスト形式の学習到達目標の見直し
- イ 小学校教員とのチーム・ティーチングによる授業及び研究支援の実施

【第2年次】

- ア 小学校の新設教科の位置付けを踏まえた中学校英語教育課程の実施及び工夫・改善
 - ・ 中1の生徒を対象にした指導法の工夫及び評価の在り方等についての研究
 - ・ 指導法（4技能の統合的な活用を図る授業の充実）の工夫及び評価の在り方等についての研究
 - ・ 年間指導計画とCAN-DOリスト形式の学習到達目標

【第3年次】

- ア 小学校の新設教科の位置付けを踏まえた中学校英語教育課程の実施及び工夫・改善
 - ・ 中1の生徒を対象にした指導法の工夫及び評価の在り方についての研究
 - ・ 指導法（4技能の統合的な活用を図る授業の充実）の工夫及び評価の在り方等についての研究
 - ・ 年間指導計画とCAN-DOリスト形式の学習到達目標の見直し
- イ 小学校教員とのチーム・ティーチングによる授業及び研究支援の実施

③ 高等学校

【第1～3年次】

- ア 中学校の授業参観及び研究支援等の実施
 - ・ 中学校英語教育の実態を把握し，中学校の教育課程の編成について参画するなどの支援体制を構築する。
 - ・ 年間指導計画とCAN-DOリスト形式の学習到達目標の見直しを行う。
- イ 中学校英語教育を踏まえた教育課程の実施及び工夫・改善
中学校英語教育を踏まえ，英語による発表会，討論等の言語活動の充実を図る教育課程の編成及び実施を行う。

○平成27年度の進捗状況・課題

〈進捗状況〉

- ・ 各小・中・高等学校の英語担当代表教員で構成する「研究推進委員会」を3月までに9回開催し，研究内容や学習内容等について協議し，各部会で具体的な研究を推進している。今

年度は、教科化に向けて準備段階であったが、現在次年度に向けて計画を進めている。推進委員は、4月当初は本事業に対する不安や疑問も多かったが、研修会や先進校視察を行う中で、主体的な研究組織として取り組んでいると感じる。

- ・ 加配教員の小学校への派遣については、連携を図りながら十分に取り組むことができた。小学校の高学年の授業を、中学校の加配教員が担当することにより、小学校の教員と協力しながら、小学校と中学校との指導をうまく接続させることができた。2学期終了時点で116回、各小学校へ訪問しており、中学校では、小学校での指導を生かしながら「聞く」「話す」「書く」ことへつなげることができている。
- ・ 小・中・高等学校の授業参観・研究協議等を通して、児童生徒の実態や授業内容などについて共通理解を図ることができた。
- ・ 小学校で扱う言語材料や Classroom English を一覧にまとめることで、既習事項を把握した上で授業を組立て、各学校で系統性を踏まえた共通した指導を行うことができた。

〈課題〉

- ・ 複式学級の指導法、異学年とのコミュニケーション活動、単元配列、年間指導計画について、研究を継続していく。
- ・ 学年間で系統性のある指導計画となるように、改善を図っていく。
- ・ 小学校5・6年生での英語教科化に向けた教育課程、教材開発、評価等の研究を推進していく。特に、英語を使って地域のことについて考えたり発信したりするための教材の作成を進めていくことが必要である。
- ・ 中学校・高等学校では、オールイングリッシュを目指した授業を行えるよう、教員の英語力の向上や生徒の言語活動の充実について研究を深めていく。
- ・ 伊佐市研究推進委員会の機能をさらに強化していく必要がある。
- ・ 家庭や地域への啓発が十分ではなかった。今後地域の実態を踏まえ、具体的な取組を検討する必要がある。
- ・ モジュールについては、来年度は週1回程度（15分）取り組んでいく予定である。計画では、週に3回の予定だったが、他教科との関係から週1回とした。内容についてはさらに研究を進める必要がある。

(6) 評価計画 ※平成27年度新規採択件については、第一年次から第三年次まで記載すること。

① 小学校

【第1年次】

ア 評価

評価研究部会を設置し、小・中・高等学校教員が連携を図りながら、評価について研究を行う。

㊦ 外国語活動型・・・第3学年及び第4学年、第5学年

- ・ 評価方法 : 文章記述とし、授業観察、児童の発表等により評価を行う。
- ・ 評価の観点 : コミュニケーションへの関心・意欲・態度

外国語への慣れ親しみ、言語や文化に関する気付き

① 教科型・・・第6学年

- ・ 評価方法：文章記述とし、授業観察、児童の発表等により評価を行う。
- ・ 評価の観点：コミュニケーションへの関心・意欲・態度
 - 初歩的な外国語表現の能力
 - 初歩的な外国語理解の能力
 - 言語や文化に関する気付き
- ・ CAN-DOリスト形式の学習到達目標に基づいた評価を検討

イ 教育課程の編成について

小・中・高等学校教員が連携した教育課程部会における外国語活動型及び教科型の教育課程の編成についての評価を行う。

ウ 独自の教材開発作成について

小・中・高等学校教員が連携した教材開発部会における、児童の発達段階を踏まえた地域や郷土の素材を生かした教材開発についての評価を行う。

エ 研究全体の評価

英語学習についての意識調査（アンケート）により、経年変化を把握する。

※ 7月及び12月実施予定（年2回）

【第2～3年次】

ア 評価

評価研究部会を設置し、小・中・高等学校教員が連携を図りながら、評価について研究を行う。

② 外国語活動型・・・第3学年及び第4学年、第5学年

- ・ 評価方法：文章記述とし、授業観察、児童の発表等により評価を行う。
- ・ 評価の観点：コミュニケーションへの関心・意欲・態度
 - 外国語への慣れ親しみ、言語や文化に関する気付き

① 教科型・・・第5学年及び第6学年

- ・ 評価方法：到達度評価とし、授業観察、児童の作品、発表等により評価を行う。
- ・ 評価の観点：コミュニケーションへの関心・意欲・態度
 - 初歩的な外国語表現の能力
 - 初歩的な外国語理解の能力
 - 言語や文化に関する気付き
- ・ 評価については、CAN-DOリスト形式の学習到達目標に基づき行う。

イ 教育課程の編成について

小・中・高等学校教員が連携した教育課程部会における外国語活動型及び教科型の教育課程の編成についての評価を行う。

ウ 独自の教材開発作成について

小・中・高等学校教員が連携した教材開発部会における、児童の発達段階を踏まえた地域や郷土の素材を生かした教材開発についての評価を行う。

エ 研究全体の評価

- 英語学習についての意識調査（※ 対象：3～6年生・教員）
 - ・ アンケートにより経年変化を把握する。

- ・ 独自に開発作成する。 ※ 7月及び12月実施予定（年2回）
- 学力調査
 - ・ 教科型の4技能を把握する。
 - ・ 独自に開発作成する。 ※ 12月実施予定（対象：5～6年生）

② 中学校

【第1～3年次】

ア 小・中・高等学校の連携を図る評価における研究体制の構築

評価研究部会を設置し，評価の観点，方法，到達目標等の検討を行い，小学校段階で教科化された英語教育を受けた生徒と受けていない生徒との到達度目標等の違いを明確にする研究を行う。

イ CAN-DOリストを反映した教育課程の編成について

小・中・高等学校教員が連携した教育課程部会における，教科化した英語教育の取組を踏まえた教育課程の編成について評価を行う。

ウ 研究全体の評価

- 英語学習についての意識調査（対象：1年生・教員）
 - ・ アンケートにより，経年変化を把握する。
 - ・ 独自に開発作成する。 ※ 7月及び12月実施（年2回）
- 学力調査
 - ・ 英語検定試験等外部試験により英語力を把握する。（対象：1年生）

③ 高等学校

【第1～3年次】

- 英語学習についての意識調査（対象：1年生・教員）
 - ・ アンケートにより，経年変化を把握する。
 - ・ 独自に開発作成する。 ※ 7月及び12月実施予定（年2回）
 - ・ CAN-DOリスト形式の学習到達目標に基づいた評価の実施

○平成27年度の進捗状況・課題

〈進捗状況〉

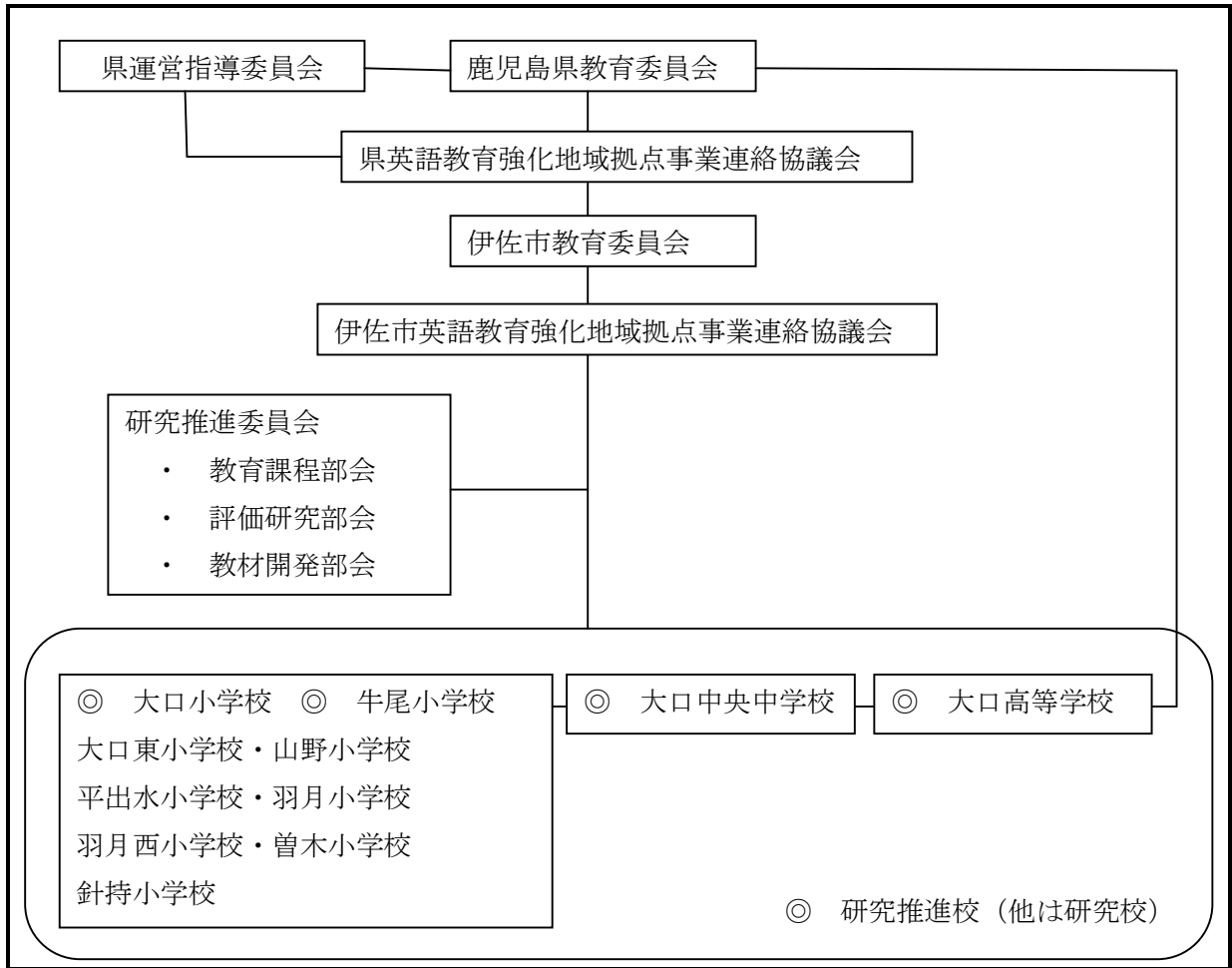
- ・ 研究計画，評価計画に基づいて実施できている。
- ・ 小学校は今年度は準備段階と考え，児童の情意面でのアンケートを実施した。
- ・ 中学校ではパフォーマンステストを定期的の実施し，実態把握を行った。また，生徒は話すことに対する意識が高まってきている。

〈課題〉

- ・ 小学校英語の教科化・早期化に向けての評価の在り方については，まだ十分な研究が行われていない。今後研究を深めていきたい。
- ・ CAN-DOリスト形式の到達目標について見直し，改善をさらに図る必要がある。
- ・ 小学校～高等学校までの教員に対してもアンケートを行い，経年変化を把握していく。

4. 研究組織

(1) 研究組織の概要



(2) 運営指導委員会

①活動計画

- 実施内容及び実施予定
 - ・ 学校長及び研究委員に対して指導助言を行う。
 - ・ 年2回（10・2月予定）実施する。
 - ・ 実施に当たっては、研究の進捗状況の情報交換に加え、当該研究校の事例発表、実践発表、研究授業等を行い、教員の指導力向上を図る実践的研究会となるよう工夫する。
 - ・ 有識者である大学教員の講話を実施し、先進的な研究となるよう工夫する。
- 指導助言を行う具体的な事項

【小学校】

 - ・ 5, 6年生におけるCAN-DOリスト形式の学習到達目標が適切であるか。
 - ・ 小・中学校の系統性を踏まえた教育課程の編成は適切であるか。
 - ・ 高学年の教科型, 中学年の外国語活動型の授業で活用する教材は適切であるか。
 - ・ 小学校段階で基礎的な英語運用力を身に付けさせる指導法の研究内容は適切であるか。
 - ・ 研究全体において小・中・高等学校連携を図り, 教育課程及び指導法などが円滑な接続

に資するものであるか。

- ・ 加配教員の活用及び非常勤講師の活用が適切であるか。

【中学校】

- ・ CAN-DOリスト形式の学習到達目標が適切であるか。
- ・ 小・中の系統性を踏まえた教育課程の編成は適切であるか。
- ・ CAN-DOリストは適切に作成され、教員と生徒間が共有化し、活用が図られているか。
- ・ 小学校教員とのティーム・ティーチングによる授業が効果的に実施されているか。
- ・ 小学校の教科化を踏まえ、英語で授業を行ったり、言語活動の充実を図ったりなど、指導法の工夫・改善が図られているか。

【高等学校】

- ・ CAN-DOリスト形式の学習到達目標が適切であるか。
- ・ 中学校の系統性を踏まえた教育課程の編成は適切であるか。
- ・ CAN-DOリストは適切に作成され、教員と生徒間が共有化し、活用が図られているか。
- ・ 小学校の教科化を踏まえた指導法の工夫・改善が図られているか。

○ 平成27年度の進捗状況・課題

- ・ 年間2回の県運営指導委員会（第2回は2月10日に開催予定）に参加した。伊佐市の取組を説明し、委員から取組の改善・充実に向けて、文字指導の在り方や環境づくり、地域の良さを生かした取組等について指導助言をいただいた。また、教職員研修の充実を図っていく必要性についても指導をいただいた。

5. 年間事業計画

月	強化地域拠点の取組	運営指導委員会
4月	第1回伊佐市英語教育強化地域拠点連絡協議会 (実施計画・研究の方向等)	
5月		
6月	先進校視察（福井県/埼玉県） 第1回県英語教育強化地域拠点事業連絡協議会	
7月	先進校視察（秋田県） 第1回研究推進委員会 (文科省事業説明の報告・先進校視察報告) 第2回研究推進委員会（目標・研究の方向性の確認） 第2回伊佐市英語教育強化地域拠点連絡協議会 講演「小学校の外国語活動及び教科化について」	

	講師 鹿児島純心女子大学	
8月	第3回研究推進委員会（教科型指導案作成） 伊佐市夏休み英語教室 （高校生ボランティア参加）	
9月	第4回研究推進委員会（指導案検討） 大口東小学校研究授業（授業参観・研究協議）	
10月	第2回県英語教育強化地域拠点事業連絡協議会 第3回伊佐市英語教育強化地域拠点連絡協議会 （牛尾小学校授業公開：授業参観・研究協議） 第5回研究推進委員会（授業公開反省等） 児童実態調査実施	第1回県運営指導委員会
11月	大口東小学校研究授業（授業参観・研究協議）	
12月	第6回研究推進委員会（次年度の研究の方向性） 大口中央中学校研究授業（授業参観・研究協議） 大口高等学校研究授業（授業参観・研究協議）	
1月	伊佐市冬休み英語教室 （高校生ボランティア参加） 第7回研究推進委員会（次年度の研究の方向性） 全国連絡協議会（成果及び課題の報告） 第4回伊佐市英語教育強化地域拠点連絡協議会 （大口小学校授業公開：授業参観・研究協議）	
2月	第8回研究推進委員会（次年度の研究の方向性について） 第3回県英語教育強化地域拠点事業連絡協議会	第2回県運営指導委員会
3月	第9回研究推進委員会（次年度の研究の方向性について）	
【その他の取組】※あれば記入		